

1. 拝殿脇の西脇順三郎撰文の蒼紫神社碑
2. 中庸の「至誠」、蒼紫神社の悠久・高明、山本五十六の「至誠」
  - (1) 中庸にある「至誠」
  - (2) 蒼紫神社によせた、忠精公の言葉
  - (3) 山本五十六記念館にある「至誠」『中庸』第二十五節 全文
3. 新しい令終会碑「記憶之園」碑と、その心
  - (1) 堅正寺脇の碑と碑文
  - (2) 作像者について

参考 令終会に関する文書

MfG\_J\_Reishuukai\_TamuraBunshirou\_TakahashiSuison

令終会、田村文四郎と高橋翠村

悠久山は、長岡駅の東、2.5キロに位置する、蒼紫神社を中心とする自然公園です。

町なかから近く、市民にとっては当たり前にある公園ですが、よそから来られる方には、うらやましく思われる、市中心部から近い自然のなかの、歴史、文化の香り高い公園です。

蒼紫神社参道脇、公園内には、幕末から明治・大正・昭和の長岡人の多くの石碑があります。

長岡は、譜代大名牧野氏の城下町で、幕末の戊辰の役では、懸命に非戦・自主独立を説いたところですが、江戸期の初期から後期、幕末、明治維新から大正、昭和の大戦まで、多くの歴史とトピックスをもつ場所です。付近の栖吉は、さらに古く、中世から戦国時代以来の歴史があります。

## 1. 拝殿脇の西脇順三郎撰文の蒼紫神社碑

(写真から文字起こし 春日)

### 正面銘文

### 蒼紫神社

凡そ二百余年前当山に蒼紫神社が造営され事代主命(俗にえびす神)と長岡牧野藩三代の英主忠辰公を祭る蒼紫神社の称号は長岡城内に御二方を御祭神として一社を造営したとき京都吉田家より事代主命の故事に因んで蒼紫霊神の神号を贈られたものである忠辰公が平素事代主命の神徳を仰ぎ崇敬特に篤かりし故に合わせ祭られた現社殿は九代忠精公により日光東照宮に模し明和六年(一七六九年) 起工し十三年を費やして天明元年八月竣工し城内より遷座されたとき此の地を悠久山と命名された大正八年当社を中心として公園を造る議があり当社も進んで境内地二万三百六十八坪(六七、三三三平方メートル)を公園用として市に寄付し又令終会が五万余坪を寄付し今日の悠久山公園が出来たものである約二百年の星霜を経て損傷甚だしく造営物の大修理を要する時期に至った昭和三十八年四月役員総改選に当たり新人が大多数選出された役員会で大修理を決議し奉讃会を作り氏子を初め有志の方々の浄財をお願いし又公園を造る時当社と長岡市との間に結ばれたる覚書により今回の大修理の工事費に相当支出を申し入れた市は憲法違反の疑いもあるので金は支出できぬと断り続けたが遂に互譲して円満解決将来再び争いの起こらぬ様契約を更新した奉讃会の寄附金土地売却代等で総収入二千三百余万円を得て昭和三十八年より同四十六年まで九カ年の歳月を費し工事を施した主なるもの次の通り本殿玉垣改築拝殿修理拝殿前の敷石神選所移転三の鳥居改築表参道北参道の大修理社務所改新築宝物庫新築等二千万円余を要したこの長き九年の歳月にわたり時の責任役員高島博氏が一切を専任し粉骨砕身全精力を注ぎ工事に当り又一方市と大正八年の覚書更新に将来の神社維持等に万全の取極めをした此処に当社創立以来御造営物の修理完工を見たので記念として一碑を建て後世に残す

昭和四十六年十月 撰文者 西脇順三郎  
額 明治神宮 宮司 伊達 巽 謹書

碑石全景



裏面 蒼紫神社奉讃会  
宮司 永井康雄 代  
魁峰 斎藤迪信 謹書

額

水沢梅吉の書、「悠久山のいしぶみの  
スケッチ集」によれば、その大きさは  
碑石の総高 305cm 幅 120cm  
台座含め 総高 402cm 幅 372cm



悠久山公園の碑・モニュメントの中で、三指に入る巨大な記念碑

撰文者の西脇 順三郎氏(1894 - 1982)は、日本の詩人(近代詩)、英文学者(文学博士)。オックスフォード大学で英文学を研究し、戦前のモダニズム・ダダイスム・シュルレアリスム運動のリーダーでもあった。小千谷市名誉市民。

後に第一回文化勲章受章者となる藤島武二の内弟子になったが、父の急死で画家の夢をあきらめざるを得なかったほどの画才もあって、生涯に多くの水彩画並びに油彩等の絵画作品を残したことで知られている。川端康成氏がノーベル文学賞を受賞した当時、三島由紀夫氏と西脇氏も、毎年のように、合計で六度、文学賞候補にあがっていた。

2020年の正月の日経新聞に、ノーベル賞選考当時の状況の公開が報じられ、今まで「うわさ」であったノーベル文学賞候補が本当であったことがわかった。

近年、この碑の前に、シロという犬の神社が立ち、由緒正しい石碑全体がイヌの社殿に隠れ、碑文も読みにくくなった。このイヌの謂れを聞いてはいますが、このようなことになりまして、誠に無念です。

小千谷市民が誇りとする同氏の撰文になる碑が、このようなことになり、申し訳ない気持ちの長岡市民も少なくないと思います。

イヌの社殿建立に奔走した人が、どのような方なのか、ここにイヌの社殿の場所を決めた方が、どのような方なのか、存じませんが、いつか、この石碑の周辺が、元のようになることを切に祈っています。

## 2. 中庸の「至誠」、蒼紫神社の悠久・高明、山本五十六の「至誠」（春日）

### (1) 中庸にある「至誠」

至誠無息（しせいむそく）は、中庸章句第二十五章の冒頭の句です。「至誠は息むこと無し」と訓読みされ、第二十五章（章の分け方は諸説）の全体では、この上ない「誠の心」をもって生涯を貫きなさい、と言う意味、悠久とは、永遠というより、万物を成り立たせる偉大なはたらきを言う言葉、そして高明とは、万物を覆い尽くす大空を示すという意味とされます。尚、この第二十五章の前の章でも、至誠は知と仁の総和と言及しており、中庸には、この他にも随所に「至誠」に言及しているところがあるようです。

### (2) 蒼紫神社によせた、忠精公の言葉

「蒼紫神社由緒略記」によれば、天明元年(1781)に現社殿の造営竣工の祝典に、忠精公が「中庸」より語を選び、山を悠久、表参道を高明、裏参道を無疆(むきょう)と命名されたとされています。

その参道の名が、拝殿前の門の名称となり、(表の)高明門と(裏の)無疆門となったわけです。そして、その名の由来が、第二十五章の最期の句の「博厚配地、高明配天、悠久無疆」の中で、示されています。

悠久山、高明門、無疆門、至誠という、なんと深い関連を有した言葉、まさに、「万物を限りなく覆い尽くす大空のごとき、至上の誠」、です。

### (3) 山本五十六記念館にある「至誠」

山本五十六記念館に、五十六さんの「至誠」の書があります。そして明治天皇御製という、五十六さんの書も、その近くに展示されています。

「ときおそきたがひはあれど貫かぬ こと無きものは誠なりけり」

Any act out of the sincerity would be accomplished successfully.

もうひとつ。

「いかならむときにあふとも人はみな まことの道をふめと教へよ」

Walk a road of the truth at any time you encounterd trouble .

これらも、「至誠」と同じ心を詠んだものと思いますが、もともとは為政者としての志、覚悟として味わうべきものなのかも知れません。

また記念館の展示図録には、東郷元帥の「終始一誠意」を座右の銘とし、至誠を生涯貫こうとしたと記されており、尊敬する上司からの影響の可能性も考えられます。いずれにせよ、自分は今まで、幼少から好んだ「Sincerity」に対応する句、尊敬する人の言葉から、と考えていました。

しかし、この中庸の句に示された「至誠」の意味するところを知ると、単に好きな座右の銘というより、為政者、そして一軍の将としての覚悟を表わす強い言葉とも詠むべきではないか、と考えずには、おられません。

このように、五十六さんが中庸の言葉「至誠」を知ったのも、もしかして堅正寺住職と親しく話している中だったのではないか、とも思いました。

これらのうち、どちらが先、というより、根本的なものを、載(の)するということで、ご本人に聞くしかないように思います。

以下は、中庸章句第二十五章の後半の文です。

故至誠無息。不息則久、久則徵。

故に至誠は息むことなし。息まざれば則ち久しく、  
久しければ則ち徵(しるし)あり、

よって、この上ない誠の心のはたらき無疆 (むきょう)  
止まることなく長く続けば、その効果があらわれることになる。

徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。

徵あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚、博厚なれば則ち高明なり。  
(このように誠は) その効果があらわれると、はるか遠くまでゆきわたる、  
はるか遠くまでゆきわたると、それはひろびろとして厚く行なわれる  
ひろびろとして厚く行なわれると、それは高々として高明に  
あふれて行なわれることになる。

博厚所以載物也。高明所以覆物也、悠久所以成物也。

博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり  
博厚とは、万物をその上に載(の)せるはたらきによるものであり、  
高明とは、万物をその上に覆(おお)うはたらきによるものである、  
悠久とは、万物を成立させるはたらきによるものである。

高明所以覆物也。悠久所以成物也。

## 『中庸』第二十五節 全文

<https://open.mixi.jp/user/17180778/diary/1940308230>

## 『中庸』第二十五節 全文

前節までに述べられているように、至誠なる者は天より与えられた性であり、人間本来の働きである。それ故に誠は外部からの力によって具現するもので無く、自らその力を発揮するものであり、その至誠に進むべき道を人は誰も進むべき道だとするのである。このような至誠は万物を形成する絶対的なものであり、誠を内に含まないものは存在しない。それだから君子は至誠への道を進み、それを実践することを貴ぶのである。このように天下の万事万物は誠が無ければ何事も成立しない、それ故に誠は自ら成すだけでなく、天下の万事万物をも成長させて行く手段である。自己を成長させ完成させるのは、仁愛であり、万事万物を成立させるのは、知の働きである。それら仁・知の働きは天性としての至誠に因って、徳として人や万物に影響を与えるものとなり、又誠は外なる知と内なる仁とを和合させるものである。

それ故に自己を成し、万物を形成するに於いて、至誠は常に適切であり理に適っているものである。それだから、至誠の自己を形成し、事の理を極める真実の働きは、常に止む事無く活動し続けるのであり、活動し続ける限りその働きは長久であり、長久であれば人間本来の働きである至誠により、徳は次第に顕著となり四方に表れる。そうなると益々永続的に広範囲に至誠の徳は現れるようになり、いよいよ博く上下に厚く万民にその影響を及ぼし、遂に高大光明を極めて、万民から仰がれるようになる。此くも広博に上下に厚く影響を及ぼす誠は、あたかも大地が万物を育んでいるようであり、高大光明を極めて万民から仰がれるのは、あたかも万物を包み込んでいる天のようであり、その働きが悠久に限り、万事を形成することが出来るし、全てに達することが出来るであろう。

このように至誠がもたらす、博厚は大地の如く、高明は天の如く、悠久は無限の宇宙の如くで、万民が自然と畏怖敬愛するものである。故にことさらに其れを外に示そうとしなくても自然と現れて明らかになるし、ことさらに事に応じて変化しなくても、適切に対応することが出来るので、意図的に事を為さなくても自然と物事は治まって行くのである。

誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之為貴。  
 誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也、成物知也。性之德也。  
 合外內之道也。故時措之宜也。

故至誠無息。不息則久、久則徵。徵則悠遠、悠遠則博厚。博厚則高明。  
 博厚所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成物也。博厚配地、高明  
 配天、悠久無疆。如此者、不見而章、不動而變、無為而成。

誠は自ら成すなり。而して道は自ら道とするなり。誠は物の終始なり。  
 誠ならざれば物無し。是の故に君子は之を誠にするを貴しと為す。誠は  
 自ら己を成すのみに非ざるなり。物を成す所以なり。己を成すは仁なり、  
 物を成すは知なり。性の徳なり。外内を合するの道なり。故に時に之を  
 措きて宜しきなり。故に至誠は息むこと無し。

息まざれば則ち久し、久しければ則ち徵あり。徵あれば則ち悠遠なり。  
 悠遠なれば則ち博厚なり。博厚なれば則ち高明なり。博厚は物を載する  
 所以なり。高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり。  
 博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆無し。  
 此の如き者は、見わさずして章らかに、動かずして變じ、為す無くして成る。

#### <解説>

この節は、仰ぐこと天の如く、伏すこと地の如く、限りなきこと宇宙の如し  
 と、至誠が如何に偉大であるかを述べている。更にそれは偉大である  
 だけでなく、誠ならざれば物無しと述べられているように、万事万物を  
 成り立たせる根本的なものであり、その働きは外部からの力によらず  
 内に秘められたもので自ら成長していく。

だから至誠を身に備えている者は、ことさらに事を為そうと右往左往  
 しなくても、自然と世の中を治める事が出来るのである。それ故に至誠を  
 身に備えている聖人君子は人々から尊び敬われるのである。

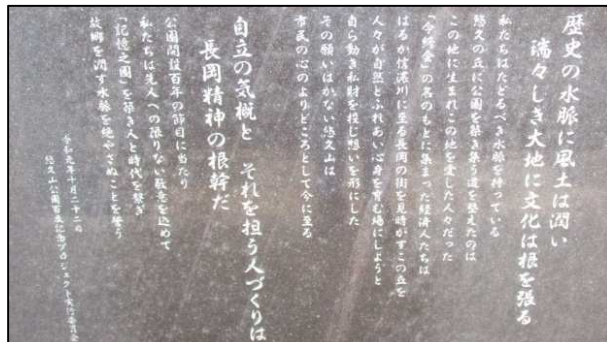
果たして現実は何かなものであろうか。

(以上)



### 3. 新しい令終会碑「記憶之園」碑と、その心

#### (1) 堅正寺脇の碑と碑文



堅正寺脇の碑

同 碑文

#### 碑文

歴史の水脈に風土は潤い

瑞々しき大地に文化は根を張る

私たちはたどるべき水脈を持っている

悠久の丘に公園を築き集う道を整えたのは

この地に生まれこの地を愛した人々だった

「令終会」の名のもとに集まった経済人たちは

はるか信濃川に至る長岡の街を見晴るかすこの丘を

人々が自然とふれあい心身を育む場にしようと

自ら動き私財を投じ想いを形にした

その願いはかない悠久山は

市民の心のよりどころとして今に至る

自立の気概と それを担う人づくりは

長岡精神の根幹だ

公園開設百年の節目に当たり

私たちは先人への限りない敬意を込めて

「記憶之園」を築き人と時代を繋ぎ

故郷を潤す水脈を絶やさぬことを誓う

令和元年十月二十二日

悠久山公園百歳記念プロジェクト実行委員会



## (2) 作像者について

山田又七像は、山田又七社長就任祝いに社員が贈呈したもので、永らく山田又七邸にあったものです。

作者は長岡藩士族の二男として生まれ、東京美術学校鑄金科を卒業の田中後次です。1899年(明治32年)美校助教授時代に、山田又七像を製作しました。後次は、昭和初年に、悠久山蒼紫神社参道脇の小林虎三郎碑、渡辺廉吉碑も作成しています。

田村文四郎像は、今も北越CORP社内にある武石弘三郎作の銅像を、3D計測機で精密に測定し、一緒に設置される山田又七像の大きさと釣り合うよう、弘三郎作の縮小像として製作されたそうです。

武石弘三郎も山田又七像を製作していますが、戦時金属供出で現存しません。田中後次の山田又七像のほうが、製作時期は早いということになります。

田中後次、武石弘三郎のふたりは、1908年の頃、出張、留学中で、ともにヨーロッパにいたのも、奇縁です。

後次の専門とする鑄金でブロンズ像は作れるだろうが、そもそも彫像のような複雑な造形は専門ではないと思います。しかも、国内で、日本人による制作は多くなかったはずで、苦労が多かったのではないかと考えています。

ちなみに、日本の銅像としては、

日本初の西洋式銅像は、1880年、兼六園の明治紀念之標(日本武尊の銅像)  
東京最古の西洋式銅像は、1893年(明治26年)靖國神社建立の大村益次郎像  
(大熊氏廣製作)

MfG\_J\_Reishuukai\_TamuraBunshirou\_TakahashiSuison の抜書き  
 令終会、田村文四郎と高橋翠村

2019年は、悠久山公園100歳記念の年でした。令終会設立の中心となった山田又七、田村文四郎二人の胸像も、堅正寺近くに建立され、お山に意義深い名所が、増えました。

山田又七については、別に「山口権三郎、山田又七」のガイド説明を作成していますので、ここでは、田村文四郎と高橋翠村について、ガイド説明をまとめました。

1. 田村文四郎と北越製紙

- (1) 田村屋から田村商店へ
- (2) 6代目田村文四郎
- (3) 田村文吉
- (4) 北越コーポレーション株式会社

2. 高橋翠村

- (1) 明治から大正期に新潟県の中越で活動した漢学者、教育家、書家
- (2) 藩の馬政に関わる長沢家の生まれ
- (3) 養嗣子となって高橋姓
- (4) 小林虎三郎の再評価に貢献
- (5) 星野保子像刻文撰者

3. 悠久と至誠

- (1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉
- (2) 山本五十六記念館にある「至誠」

令終会の命名 高橋翠村

会津八一の年譜ノートに「一八九五(明治二十八)年、新潟中臈一年級に入学す。習字は高橋翠トンに学ぶ」とある。  
 のように、会津八一の書の先生として知られている。

参考 解説抜粋

中庸章句第二十五章

高橋翠村について(まちづくり市民研究所 第2期 報告書)(2015)

高橋翠村2\_長岡アーカイブ14号 連載 長岡の碩学(14)(2017)

そのほか、妻有の人物史 I (平成二年 十日町市博物館)